長野大学紀要　第17巻第4号　61—65頁（367—371頁）1996

『グリム童話集』注釈の試み (3)（KHM 4，5）

Untersuchungen der Anmerkungen der Kinder-und Hausmärchen der Brüder Grimm (3) Nr. 4 und 5.

小　高　康　正
Yasumasa KOTAKA

KHM 4

Märchen von einem, der auszog, das Fürchten zu lernen

「怖がることを習いに旅にでた男の話」

1　AT 326

アールネ／トムソンの分類では、「本格昔話」で「魔法の話」の中の「怖いものを知りたがった若者」（The Youth Who Wanted to Learn What Fear Is）にあたる。

それによれば、このタイプの話の構造は次のようになっている[1]。

Ⅰ．怖さの探索。怖いとは何か知らない若者がそれを見つけに旅に出る。

Ⅱ．経験。彼はさまざまな恐ろしい経験をする。(a)教会で悪魔とトランプゲームをする。(b)幽霊から服を盗む。(c)絞首台の下で、(d)墓場で、または、(e)死んだ男の手足が煙突から落ちてくる化け物屋敷で、夜を過ごす。(f)化け猫を退治する。(g)継ぎ合わされた死人と九柱戯（ボーリング）をする。(h)幽霊床屋にひげを剃ってもらう。(i)悪魔の指の爪を切ってやる。

Ⅲ．怖さを学ぶ。結婚後、冷たい水をかけられたり、眠っている間に、鰻を背中に入れられて、恐さを知る。

このタイプの話はヨーロッパには広く分布しているが、アジア、アフリカには見られないと言われる[2]。わが国では、恐怖に耐えた者が宝を得たり、幸福をつかむという「宝化け物」（大成258）「化け物寺」（大成259）「化け物問答」（大成260）などに同じモチーフの一部が見られるが[3]、このタイプの全体と一致するものはみあたらないようである。

2　この話は初版（Ⅰ，1812）において「ボーリングとトランプ遊び」（Gut Kegel-und Kartenspiel）という題名で第4番に置かれたのが最初である。第二版（1819年）よりタイトルの「怖がることを習いに旅にでた男の話」に変えられた。それゆえ「エーレンベルク稿」には残されていないので、ここでは初出の話を紹介する。

昔、年老いた王がいた。彼には娘がひとりおり、彼女はこの世で最も美しかった。当時、王は「私の古い城で三日間夜を明かすものに姫を嫁に取らせる」と世に知らせた。

そこで家を出た貧しい若者は考えた。「俺が命をかけてやろう。なにも失うものはないさ。うまく行けばたくさんのものが手に入るし、さあ、何を考えているのだ。」

彼は王の前に進み出て、城で三晩明かすことを申し出た。王は「おまえはなにか城の中に持っていくものを申し出てもよい。ただし、生命のないものに限る」と言った。

「それなら、彫刻台と彫刻刀、旋盤と火を下さい。」

それらがすべて城へ運びこまれた。それから暗くなり始めてから彼は自分で城の中へ入った。城の中は初めのうちは何もかも静かであった。若者は火をつけ、彫刻台を刀と一緒に彼の傍らに置き、旋盤の上に腰をかけた。真夜中近くになると、がたがたという音が始まり、かす

かな音がだんだんと大きくなり、ドーン、ウォーとますますひどくなってきた。それから少しの間、静かになり、一本の足が煙突から落ちてきて、彼の目の前に突っ立った。「おーい、もういっちょう、一本じゃ足りないぞ」と若者は叫んだ。新たに音がしてもう一本の足が落ちてきた。さらにもう一本とつぎつぎに落ちてきて、9本になった。「さあ、これで十分だ、ボーリングするのにちょうどいいぞ、でもまだボールが足りないな。」するとドタバタと騒ぎ回る音がして二つの頭蓋骨が落ちてきた。若者はそれを旋盤の上に並べて、回転させて丸くした。「うまく転がってくれよ。」それから彼は足の方も同様にして、ボーリングのピンのように立てた。「ひゃー、これは愉快だ。」

すると二匹の大きな黒猫が現われて、火の回りを回り、「ニャオ、寒いぞ、寒いぞ」と叫んだ。「おい、おまえたち、何を叫んでいるんだ。火のそばに座って、暖まれよ。」猫たちは暖まると、「相棒、一つトランプでもやろうか」と言った。「よし」と彼は答えた。「でもちょっと、おまえたちの手を見せてくれ。こんなに長い爪をしているのか。俺が切ってやるよ。」そう言うと、彼は猫たちの襟首をつかみ、彫刻台の上に載せた。そこでしっかりとねじで固定すると、彼らを放り投げて死なせた。それから彼らを運び出し、城の向かいの小さな池に投げ入れた。若者は猫をおとなしくさせると、もう一度火の所に行った。すると、たくさんの黒い猫や犬が至る所からどんどん出てきて、彼は隠れることができなかった。猫や犬たちは彼の火のところにやってきて、めちゃめちゃに引っかき回し、完全に火を消してしまった。そこで彼は彫刻刀を握って、「出ていけ、ならず者め」と言って、切りつけた。大部分は逃げ、残りは投げて殺し、これも池の中へ運んだ。それから彼は再び火の粉に息を吹いて火を起こし、暖まった。

彼は暖まると、疲れが出てきて、隅にあった大きなベッドで横になった。そして彼がまさに寝入り込もうとしたとき、ベッドが動き、城の中を走り回った。「こりゃいいぞ、もっとやれ」と彼は言った。するとベッドは六頭の馬が引っ張っているように、敷居や階段を越えて走った。「さあ、それ。」何もかもひっくり返って、彼は下敷きになった。それで彼は枕と毛布を放り上げて出てきた。「行きたければ勝手にしろ。」彼は火のそばに行き夜が明けるまで眠った。朝になると王様がやってきた。若者が横たわって寝ているのを見て、彼はてっきり若者は死んだものと思った。「惜しいことをした」と彼は言った。その言葉を聞くと、若者は目を覚ました。彼は王様をみると、起き上がった。王様は彼に夜はどうであったかをたずねた。「うまくいったよ。一晩過ぎれば、二晩目は同じように過ぎるさ。」後も同じだった。しかし彼にはもうどうなるかわかっていた。四晩目には彼に美しい王女が与えられた[4]。

3　初版の「ボーリングとトランプ遊び」の話についてはグリム兄弟の注釈はつけられていない。

第二版以後、現在の話に変えられた。最初の「ボーリングとトランプ遊び」の話には化け猫やボーリング、魔法のベッドのエピソードはあるが、現在の版に見られるような<怖さを習う>というモチーフは含まれていなかった。

その後、グリムの注釈では第二版（1819年）の「怖がることを習いに旅にでた男の話」を出すまでに、6編の話が集められている。その中から「メクレンブルク地方の話」をもとに、「シュヴァルム地域のヘンセンの話」を混成し、さらにカッセル近郊の「ツヴェーレン」（ドロテーア・フィーマン（Dorothea Viehmann 1755-1815）による）の話から「死者を担いできて、ベッドで暖める」モチーフが取り入れられてできたことが言われている。

第三の類話（正確な出所は明らかにされていない）では、若者はベッドで寝ている間に、仕立屋のおかみさんに水をかけられる。

第四の話（これも正確な出所は明らかにされていない）では、若いチロルの男が怖さを習いに出かけるが、ここでは幽霊が剃刀を持ってきてひげを剃れと言う。この話には勝者である印に、死んだ竜の口から舌を抜き取るモチーフが出てくる。

第五のツヴェーレンの話（これもドロテーア・

フィーマンによる）は、やはり怖さを習いに世の中に出かけた鍛冶屋の息子が、いろんな経験のすえ、財宝を手に入れる。最後に、大砲の音を聞き、怖さを知る。ここにはボーリングやトランプは出てこない。

第六のパーダーボルンの類話（ハクストハウゼン家から得たもの）では、この世に怖いものはないハンスが、幽霊の出る城の中で三日間寝ないで、幽霊とトランプなどして、退治する。王様から褒美として姫を妻にもらう。しかし怖さを習うという結末がない。

また、ひとつひとつ触れることができないが、グリムの注釈ではそれら以外に、様々なメルヒェン・伝説集の中の類話がその番号やページ数だけであるが指摘されており、初版を出した後も類書にはくまなく目を通していることが伺われる。

初版の話の出所については、1812年の自家版の本に「ジーベルトより」という手書きメモが残されており、これまでこの話は、ジーベルト、つまり、カッセル近くのトライザの牧師の息子であるフェルディナント・ジーベルト（Ferdinand Siebert 1791-1847）によるものであると思われていた[5]。しかし、レレケは、ジーベルトがグリム兄弟に書いた手紙から、彼がこの話を送ったのではないと判断している。つまり1813年、初版が出された4週間後、ジーベルトは本を送ってもらったお礼の手紙に、「自分の知っている話とほとんど同じだ」と書いていた[6]。そこでレレケはこの「ボーリングとトランプ遊び」の話は、当時、グリム兄弟のカッセルの知り合いであるフィリピーネ・エンゲルハルト（Philippine Engelhard 1756-1831）という女性詩人の語ったものではないかと推測している[7]。

先に述べたように、その後グリム兄弟はいくつかの類話を集め、第二版（1819年）以降、ジーベルトが送り付けてきた口承にもとづいた話に＜メクレンブルクの話＞と＜ツヴェーレン＞の話とを混ぜたのである。

この混成の話をヴィルヘルムは最初、『占い杖』（*Wünschelruthe*, Nr. 4, 12. 1. 1818）という雑誌に公表した[8]。これはベーケンドルフのアウグスト・フォン・ハクストハウゼン男爵（August von Haxthausen 1792-1866）とその仲間たちが発行していた雑誌である。グリム兄弟はハクストハウゼン家の人たちとも親交があり、多くのメルヒェンを手に入れている。

この第二版（1819年）以後の話（第七版までの変更はごくわずかである）[9]はジャンル的に見れば、「典型的なメルヒェン」から「笑話的メルヒェン」に変わっている[10]。初版の話と第二版（1819年）以後のヴィルヘルムの手直しを比べてみると、タイトルが変わり、＜怖さを習う＞というモチーフが加わった。また話の内容に＜不思議さ＞がなくなり、この世の出来事になって伝説のような語りになった。そして全体的におどけた調子に変えられた。

KHM 5
Der Wolf und die sieben jungen Geißlein
「狼と七匹の子ヤギ」

1　AT 123

アールネ／トムソンの分類では、「動物昔話」の「狼と子ヤギたち」。狼が母ヤギの留守中にやってきて、子ヤギたちを食べてしまう。母ヤギが狼の腹を切り、子ヤギを救いだす[11]。

26番目の「赤ずきん」（Rotkäppchen）も同系統の話だが、こちらは AT 333「人食い」に分類されている。

日本では「天道さん金の鎖」（大成245）が同一系統のものと考えられているが、いろんなモチーフが含まれているため、必ずしも一致してはいない。また日本の類話では、「三枚の護符」や「牛方山姥」のように、鬼、山姥、狼などに追われ、逃げていくという「逃竄の条」が重要なモチーフとなっており、こちらの方はグリムの話には見られないという違いもある[12]。

2　手稿（1810年）第6番「狼」

昔々、一匹のヤギがいました。そのヤギには七匹の子ヤギがいました。母ヤギは出かけねばならなくなり、子ヤギたちに狼に注意し、絶対に家の中に入れないように命じました。

まもなく狼が家の前にやってきて、言いました。子供たち、私を中に入れておくれ、おまえ

たちのお母さんが帰ってきたのだよ。しかし、七匹の子ヤギは言いました。ぼくたちのお母さんはそんなしわがれた声をしていないよ。おまえは狼だ、おかあさんじゃない。そこで狼は去って、雑貨屋へ行き、チョークを買って、もっと声をきれいにするために食べました。それから再び家に行き、高い声で叫びました。子供たち、おかあさんを中へ入れておくれ。しかし狼は足を窓にかけていました。そこで子ヤギたちは言いました。ぼくたちのおかあさんは黒い足をしていないよ。だから中へは入れないよ、おまえは狼だから。狼は今度は粉屋のところに行き、粉屋、俺の足に粉をかけろと言った。粉屋が嫌だと言うと、狼は食うぞと脅かしたので、そうせざるを得ませんでした。

（「粉屋、粉屋、おれの前足に、おまえの白い粉をつけてくれ！」
「いいえ、だめだよ！」
「それじゃ、おまえを食べるぞ」）[13]

さて狼は再び家の前に行き、中へ入れるようにたのんだ。子ヤギたちはまた足をまず見ようとした。狼は窓の中へ足をのばしたので、足が白いのが見えた。それで彼らはおかあさんだろうと信じて、戸を開けに行った。しかし狼を見るや、彼らはできるだけうまく隠れた。一匹はテーブルの下に、二匹目はベッドの中に、三匹目はかまどの中に、四匹目は台所に、五匹目はタンスの中に、六匹目は大きな鉢の中に、七匹目は時計の中に隠れた。しかし狼は時計の中の一番末の子ヤギ以外は全部見つけて、むさぼるように飲み込んだ。

狼が去り、母親が戻ってくると、一番末の子ヤギは時計の中から飛び出てきて、起こったことを全部話した。

狼の方は、腹いっぱい食べたので、緑の草地へ行き、日にあたって横になり、ぐっすりと眠ってしまった。母ヤギは一番末の子ヤギに、はさみと針と糸を取って来させ、狼の大きな腹を切ると、六匹の兄弟が無傷のまま飛び出した。なぜなら狼はまるごと飲み込んでいたからだ。その後母ヤギは石ころを取ってきて、狼の腹の中に詰め込んだ。そしてもう一度縫い合わせた。狼は眠りから目を覚ますと、腹のあたりが重苦しく感じて、言った。腹の中でごろごろ鳴っているのは何だろう。俺は子ヤギを六匹食べただけなのに。狼はのどの渇きをいやそうと泉を探した。しかし石の重さのために、水の中へ落ちてしまった。そして七匹の子ヤギは泉の回りで喜んで踊った。

3　初版（I，1812）以来、メルヒェン集の第5番。グリム兄弟の注釈では出所については「マイン地方より」と記されているだけである。

ハーナウのハッセンプフルーク家（Familie Hassenpflug）の口承に従って、1810年以前にヤーコプによってメモされた[14]。この家族の母方（旧姓 Dauphine）はフランスのユグノー出身で、1798／99年にハーナウからカッセルに移ってきた。エーレンベルク稿のテキストにはフランス語の韻文が書き入れられていた（初版からは削除され、注釈に入れられた）ように、レレケの推測によると、「ハッセンプフルーク家の姉妹はこの話をハーナウにいた幼年時代に聞いたのを思いだした。おそらく彼女たちは部分的にフランス語をまじえて語ったのだろう。」[15]

グリム兄弟はここでもいくつかの類話を注釈の中に取り上げている。「ポンメルン地方では、母親が出かけている間に、化け物によって飲み込まれてしまう子どもの話が語られている。」(Grimm. S. [27].) この話は、レレケによると、有名な女優ヘンリエッテ・ヘンデル＝シュッツ(Henriette Hendel-Schütz 1772-1849) によってカッセルで1806年以前にヴィルヘルムにもたらされたものである[16]。

またボーナーの33番の話（Boner, Nr. 33）に「母ヤギが子ヤギたちに、声を変えてやってくる狼には気をつけて、中へ入れてはいけないと警告する」ことが取り上げられている[17]。

第四版（1840年）から第五版（1843年）にかけてテキストの大きな変更がなされたが、これはレレケの明らかにしたところによれば、アウグスト・シュテーバー（August Stöber）の「七匹の子やぎ」のテキストを手本として変えられたものである[18]。

1822年のグリム兄弟による注釈書の私家版に、ヴィルヘルムの「シュテーバーのエルザス地方の民話、100ページ、七匹の子ヤギ、上手に語られている。第5版に利用」という欄外への書き込みが残されている[19]。

レレケはグリムとシュテーバーの関係はギブアンドテークだと考えている。シュテーバーの民話集は1842年に出されており、当然グリム兄弟の『メルヒェン集』も参考にしていたことは容易に想像される。ヴィルヘルムは版から版へとテキストを変えていく中で、自分の趣味と経験によるだけでなく、民衆の語りを重視していた。そしてシュテーバーはエルザス地方の方言を用いて忠実に記録しているように思われた点で、ヴィルヘルムの注目を引き、借用したと考えられる[20]。

（こたか　やすまさ　教授）

（1996. 1. 9　受理）

注

1）Anti Aarne/Stith Thompson: *The Types of the Folk-Tale.* Helsinki ³1961 (FFC 184), S. 114.

2）Thompson, Stith: *The Folktale,* University of California Press, 1977, p.105. (S. トンプソン＝荒木博之他訳『民間説話』社会思想社、昭和52年、上165ページ)

3）関敬吾『日本昔話大成』（第7巻）角川書店、昭和54年、66—90ページ)

4）Rölleke, Heinz (Hrsg.): *Kinder-und Hausmärchen. Gesammelt durch die Brüder Grimm. Vergrösserter Nachdruck der zweibändigen Erstausgabe von* 1812 *und* 1815, Göttingen 1986, S. 14–17.

5）Vgl. Bolte/Polivka, Bd.I, S.22. Schoof, Wilhelm: *Zur Entstehungsgeschichte der Grimmschen Märchen,* Hamburg 1959, S.81-87.

6）Rölleke, Heinz: >Märchen von einem, der auszog, das Fürchten zu lernen. Zu Überlieferung und Bedeutung des KHM 4<, in: *"Wo das Wünschen noch geholfen hat": Gesammelte Aufsätze zu den "Kinder-und Hausmärchen" der Brüder Grimm,* Bonn: Bouvier 1985, S. 148.

7）*Ibid.*, S. 148f.

8）*Ibid.*, S. 152.

9）若者に<怖さ>を教えてやろうとした教会の管理人が若者に突き落とされて死ぬ箇所が、現在の版では、単に足の骨が折れただけと変更された。

10) Rölleke, a.a.O. S. 153. W. Berendsohn: *Grundformen volkstümlcher Erzählkunst in den KHM der Brüder Grimm,* Hamburg 1921, S.90.

11) Anti Aarne/Stith Thompson, a.a.O., S.50.

12）関敬吾『日本昔話大成』（第6巻）角川書店、昭和53年、250ページ。

13）この部分のみ原文はフランス語。

14) *Kinder-und Hausmärchen: Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm,* hrsg. von Heinz Rölleke. 3 Bde. Stuttgart (Philipp Reclam) 1980. Nachweise. S. 444.

15) Rölleke (Bonn 1985), a.aO., S.77.

16) Rölleke, Nachweise. S.444.

17) *Die älteste Märchensammlung der Brüder Grimm. Synopse der Handschriftlichen Urfassung von* 1810 *und der Erstdrucke von* 1812. Hrsg. von Heinz Rölleke. Cologny-Geneve 1975. S. 362.

18) Rölleke (Bonn 1985), a.a.O., S.75–87. 同様にKHM15「ヘンゼルとグレーテル」における場合もシュテーバーの本からの借用が見られることが指摘されている。

19) Ibid., S.80. しかし、1856年の注釈版では、そのようなコメントは記されておらず、ただ他の文献と並んで、「エルザス地方よりシュテーバーの民話、100ページ」(*Elsässisches Volksbüchlein,* Straßburg 1842, Mr. 242, S. 100f.) という記載しかされていなかった。

20) Ibid., S.87.